

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2010年 09月 29日

派遣者氏名（専門分野）	上原 真依	（ 西洋美術史 ）
-------------	-------	-----------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	カルロ・クリヴェッリの祭壇画再構成
-------	-------------------

派遣期間

2010年 6月 5日 ～ 2010年 6月 17日（13日間）

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	アメリカ合衆国	シカゴ	Art Institute of Chicago	Eve Straussman-Pflanzer
		クリーヴランド	The Cleveland Museum of Art	Amanda Mikolic
		デトロイト	Detroit Institute of Arts	Salvador Salort-Pons
		ワシントン DC	National Gallery	
		ニューヨーク	Metropolitan Museum of Art	
			Brooklyn Museum	Richard Aste
		フィラデルフィア	Philadelphia Museum of Art	Teresa Lignelli
		ボストン	Museum of Fine Arts	Frederick Ilchman
Isabella Stewart Gardner Museum				

派遣先で実施した研究内容

アメリカ中部および東海岸で、カルロ・クリヴェッリの祭壇画パネルを所蔵する 9 美術館を訪問し、計 18 枚のパネルを実見、精査した。特に次頁記載のように 6 美術館では学芸員の方との面談の後、パネルを額縁から外し、断面や裏面を精査し、マイクロスコープを使った細部の確認や紫外線照査に立ち会った。さらに、各館所蔵の作品ファイルや修復報告書を閲覧し、美術館がパネルを購入した際の作品状態、修復状況を知ることができた。また、ボストンの Museum of Fine Arts では、美術館改装中で人員不足だったため、パネルを額縁から外してもらうことはできなかったが、秋の改装終了後に裏面や断面の写真撮影を行い、写真を転送していただくことになっている。

特に、シカゴ美術館所蔵の《磔刑図》については、これまで派遣者が研究を行っていた《カステル・トロジーノ祭壇画》の構成パネルである可能性が高いため、パネルの断面における絵の具層の状態、19 世紀の補筆の状態を、他の構成パネル（東京、国立西洋美術館の《聖アウグスティヌス》、オックスフォードの《洗礼者聖ヨハネ》、マーストリヒトの《聖ベネディクトゥス》）の 3 枚のパネル。派遣者は昨年度までにこれらのパネルの調査を行っている）の現存状況データと比較しながら、学芸員 Eve Straussman-Pflanzer 氏と意見交換を行った。

各館における調査内容は、以下の通りである。パネルの作者は、すべて15世紀の画家カルロ・クリヴェッリ。

美術館	作品名	調査実施内容
Art Institute of Chicago	《磔刑図》	<ul style="list-style-type: none"> <li>・所蔵館学芸員との面談、</li> <li>・パネルの精査（裏面、断面、額縁下を含む）、</li> </ul>
The Cleveland Museum of Art	《聖ニコラウス》	
Detroit Institute of Arts	《ピエタ》ほか計3枚	・作品ファイルの閲覧、
Brooklyn Museum	《聖大ヤコブ》	・所蔵館実施の修復および科学調査報告書の閲覧
Philadelphia Museum of Art	《ピエタ》	（上記4点に加えて）紫外線照査、赤外線照査
Museum of Fine Arts Boston	《ピエタ》	（上記4点に加えて）マイクロスコープを使った細部精査
Isabella Stewart Gardner Museum	《聖ゲオルギウス》	所蔵館学芸員との面談、パネルの精査、作品ファイルの閲覧
Metropolitan Museum of Art	《聖母子》ほか計7枚	
National Gallery	《聖母子》2枚	

## 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

19世紀のイタリアでは、国内の動乱の影響もあり、数多くの美術品が売却され世界各地に散らばった。本研究の目的は、売却時の記録をもとに作品の実地調査を行うことで、15世紀の画家カルロ・クリヴェッリの祭壇画の原状を復元し、その解体と流出・散逸の過程を明らかにすることにある。特に今回の調査では、パネルを実見することで、祭壇画額縁痕跡、パネルのサイズ、裏面のラベルを確認し、昨年度の古文書館調査で明らかになった新出史料と比較することで、祭壇画の再構成を試みた。

パネルの実見の結果、アメリカ所蔵のパネルの多くは裏面のラベルを残しておらず、パネルの厚みが半分以上削られるなど、パネル改変が顕著であることが判った。しかしラベルは無かったものの、表面の額縁痕跡や、パネル断面および裏面を精査することで、パネルサイズ改変の痕跡を多く確認し、祭壇画の原状を推測する大きな手がかりを得ることができた。特に、シカゴの《磔刑図》については、アスコリ・ピチェーノ古文書館で派遣者が確認した《カステル・トロジーノ祭壇画》に関する新出史料に記載されたサイズと最大5cmの違いがあったが、パネルを実見し作品ファイルを閲覧したことでサイズ改変の痕跡を確認できたため、史料記載の《カステル・トロジーノ祭壇画》構成パネルと同一パネルの可能性が高いと結論づけることができた。これにより、先行研究では判明していなかった《磔刑図》の本来の設置場所や祭壇画の構成を明らかにできた。

## 派遣後の研究発表の予定

2010年9月20日マチェラータ大学のStoria dell'arte modernaのゼミ内で、さらに2010年10月23日イタリア学会全国大会（於 大阪大学）にて、シカゴの《磔刑図》の調査内容を踏まえた《カステル・トロジーノ祭壇画》再構成に関する研究発表を行った。

また、詳しい史料紹介を含めた論文は、民族芸術学会発行の『民族芸術』第27号（2011年3月）に掲載された。